

# 課題研究論文

「コーチ学研究の現状と課題」

## 「コーチ」学を特集するにあたって

びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要第3号の特集として「コーチ」に関する論文が求められた。そこで構成員5名が数回にわたり議論をした結果、吉田敏明教授によるコーチ（学論）に対する概念規定を総論とし、他はこれを基にした各論的立場でそれぞれの専門領域から論述することとした。

結果は、バレーボールを実技背景とする吉田の深い洞察力から発した総論が提出された。そして、個人種目的観点として、植田がテニスを背景に論述した。競技の立場から渋谷は、本学の女子駅伝チームの現状と課題の分析をもとにコーチ（学）のあり方に一石を投じた。そして、松田が自らのサッカー指導を背景に集団種目のコーチのあり方について文化論などを駆使しながらまとめんとしている。最後に豊田がスポーツ心理学をメンタルトレーニングに限定し、これがコーチ（学）にどのように位置づけられるのが望ましいのかなどについて自らのメンタルトレーニングメソッドを紹介しながら論述した。

これらの中で特色としてあげられるのは、コーチ（学論）コーチングなど未だ明確な呼称に戸惑いが見られる本分野の背景には、近代スポーツ科学が、どちらかといえばヒトの解明を中心とし、人という人格と個性を有する存在に対する究明が今一步停滞していることではなかろうか。現場に立つ指導者は、選手にそれぞれひとと味違う隠し味でもって完成を求めるが、その部分はどのようにすれば説得力のある論理となり得るのか。

「観」、「勘」、「直感」、「共感」、「共鳴」などの観点も含め、換言するならば唯識的論点からの接近が待たれる。

豊田一成